

59 一九〇〇年以降の日本における

## プロテスタント・ミッシヨンの医療伝道

高安伸子

今回の報告は、主資料として明治学院大学図書館所蔵の The Christian Movement in Japan と The Christian Movement in the Japanese Empire を使用し、幕末にはじまった医療伝道の推移を考察したものである。この資料は日本で活動していたキリスト教団の年鑑である。

The Christian Movement in Japan と The Christian Movement in the Japanese Empire は、同じ年鑑であるが一九一五(大正四)年から Japan ではなく Japanese Empire とされた。明治学院大学図書館には一九〇七(明治四〇)年の第五巻より一九六〇年代に発刊されたものまでが所蔵されている。

Wallace Taylor が一九〇〇年の全国宣教師会議で医療伝道 (Medical Missions) の将来性として社会慈善事業

(Charity) への転機を提言したことを前回報告した。今回は The Christian Movement in Japan (一九〇七) 収録の Albert Arnold Bennett Medical Mission Work と The Christian Movement in the Japanese Empire (一九一七) 収録の S. Heaslett Christian Medical Work in Japan により、テイラーの提言がその後の医療伝道の方針にどのように生かされたのかについて考察を行なった。この二編の論文については、長門谷洋治「近代日本における外人宣教師医の研究」『日本医史学雑誌』第一六巻第一号で触れられている。

この二編の概要を紹介しておく。Bennett の Medical Mission Work においては一九〇〇年以降の各ミッシヨンの動向が報告されている。この一九〇七年の論文で興味深いのは、各ミッシヨンで医療伝道の中心となるべき宣教師が帰国してしまっていたり、将来の医療伝道はすでに終わったとする見解をもっており、テイラーのチャリティーへ転換すべきとの提言をふまえて救済施設などの設立に重点を置くことである。また来日宣教師の活動を阻害している原因として一九〇六

年五月に公布された医師法(法律第四七号)をあげている。HeaslettのChristian Medical Work in Japanではアルメイダにはじまる日本におけるキリスト教の医療伝道の歴史が述べられており、最後に日本での宣教医たちの活動とその影響を総括している。

日本におけるプロテスタント・ミッションの活動は一九〇〇年頃より過渡期にあり、様々な教団がそれぞれの方針で活動をしていた。これは日本政府の政策や宣教師を派遣していた国々の国内事情にも変化が起きていたことから、教団の方針も転換せざるを得なかった。また、本来イエスの癒し(healing)は各地を巡回して行うものであったため、開国した日本に到着した宣教医たちも都市部から地方へ巡回(touring)して医療伝道を行っていた。この巡回も西洋医学を学んだ日本人医師が増えたことにより方針が変更された。変更された方針はやはり聖書に基づく救済施設や盲人などの救護施設の設立といった社会慈善事業であり、東京、熊本などにそのための施設が創設された。

日本における幕末から行われていた医療伝道が終焉を

迎えた第二の要因は日韓併合であると思われる。一九一〇(明治四三)年に日本は韓国を併合した。今回使用したThe Christian Movement in the Japanese Empireは一九一二年以降より韓国における医療伝道の記事がおおく掲載されるようになり、のちには日本、韓国、台湾の三カ所における各ミッションの活動を収録するようになった。これはプロテスタント・ミッションが日本政府の政策を伝道地拡大の機会として日本を拠点に韓国および台湾へ宣教医を派遣した経緯をよく示している。韓国および台湾に派遣された宣教医については次回報告する予定である。

(順天堂大学医学部医史学研究室)